

2019年8月31日

博士学位請求論文審査報告

審査委員 主査 門田 理世¹

副査 田代 裕一

副査 深谷 潤

論文題目：「乳児保育における担当制の種類と保育プロセスの検証」

学位申請者：人間科学研究科人間科学専攻 14DH001 土田 珠紀

【本論文の目的】

本論文は、保育実践者である申請者の経験に基づく視点と発想を起点に、乳児保育における食事場面における保育担当制の種類の特徴とそこで展開される保育プロセス（特に保育者の援助内容・援助方法・子どもの関係性）を明らかにし、保育担当制別にみる保育プロセスの在り方を解明することを目的としている。

【本論文の概要】

本論文は三部全6章で構成されている。

第I部「本研究の問題と目的」第1章では、「保育者と子どものかかわりを中心に乳児保育の質を研究する意義」について概説し、保育の質が重視される背景、昨今の乳児保育が抱える課題から、本研究の意義及び目的を挙げている。まず、保育の質に挙げられる2つの質の観点（構造の質とプロセスの質）の定義、構造の質に位置づけられる保育担当制という保育形態の意味、そして、本研究においてプロセスの質をとらえる対象とした1-2歳児の食事場面における現状と課題を述べたうえで、その場面におけるプロセスの質を検証することの意義について論じている。また、研究の理論的枠組みとして「食事をする能力の発達を促す保育者の援助」「保育者の援助を支える子どもとのアタッチメント関係」の視点から、上記と合わせた先行研究が行われており、ここから、「担当制の保育実態の現状と類型」、「担当制保育の課題」、「保育者の援助内容と方法」、「アタッチメント行動の発達段階」、そして「文化的活動としての食事場面」の意義と課題を明示している。

第2章では、担当制保育の3類型（場所担当型：グループ援助型：個別援助型）と保育者の援助方法と内容との関連を捉えるための方法論として、食事場면을対象とした参与観察（ビデオ、筆記による）及び発話分析及び行為・行動分析の意義についてを論じている。本研究における食事場面は、どの保育所でも見られる普遍的な保育場面でありながら3つの保育担当制の違いを浮き彫りにさせることを目的とした本研究における配慮と留意事項も

併記されている。

第Ⅱ部は3章から構成されており、各章ごとに上記目的を検証するための調査研究が立てられている。第3章では、「保育者が文化的活動としての食事の成立を促すためにどのような援助を行っているか」という視点からデータ収集が行われており、3類型において保育者の援助内容及び方法にそれぞれの特性があることが明らかとなった（例：子ども主体に援助する個別援助型）。第4章では、「保育者は個と集団それぞれにどのような感性を持ち、どのような方法で援助しているのか」を命題として調査が行われた。結果、子どもの食事を子どもとの協議によって支えるのか、または、子どもに直接かかわることで支えるのかなど、保育者の主導性と子どもの主体性の相互作用による食事場面の特性が浮き彫りとされた。第5章では、「保育者と子どもは情緒的利用可能性を視点としてどのような関係性を持っているのか」という観点で調査検証された。その結果、子どもと保育者の関係性が保育者の子ども観や食事観といった担当制保育の特性が持つ実践感覚によって左右されることが見られ、特に、個別援助型においてはそれぞれの子どもの様子に応じた細やかな対応が可能なが示唆された。

第Ⅲ部は総合考察となっており、各章の総括及び本研究における限界と今後の課題が挙げられている。まず、3つの類型ごとに各担当制保育の特性あげ、次に、各担当制における保育プロセスの質を考察している。ここでは、「保育者と子どもの人数比と時間的構造」「保育者による個人と集団の捉え方」「保育者と子どもの継続的なかかわり」の3点を挙げている。1保育者に対する子どもの数や保育時間の割り当て方、乳児期という発達を個及び集団として支える保育者の保育間の相違、そして、日々の食事場面という日常における継続的な人間関係としての関係性が、保育担当制の類型に見る保育プロセスの意義として考察している。

【本論文の評価】

本研究の目的は、乳児保育の需要が高まる今日の社会的課題に対し、保育現場からいかに子どもの育ちを支えるかという大局から、1-2歳児の食事場面における保育担当制の意義と保育者の実践でのかかわりを検証することを主眼としている。特に、保育形態としての保育担当制の類型をフィールドワークによって分析検証した論考は少なく、また、保育形態という構造の質と保育者の保育方法という保育プロセスの質を関係づけて考察を行った研究もあまり見られないことから、これまでの実践研究において十分に明らかにされてこなかった保育構造の質と保育プロセスの質の関係性を1-2歳の食事場面に見出そうとしたことは、他の保育場面における重要な課題の解決の一助をなすものであるといえる。

上記研究命題に対して、理論枠組みの構造化の中で、先行研究の検討が行われている。先行研究がどのように関係しあうことで、本研究における理論の柱となりえるのか。担当制の保育実態の現状と類型、担当制保育の課題、保育者の援助内容と方法、アタッチメント行動の発達段階、そして文化的活動としての食事場面について、を丁寧に整理し、そこから、本

研究の意義となる構造の質にみる保育プロセスの質を検証する柱を浮き彫りにさせたことで、分析の視点が明確にされ、論考研究の基底が明示された。

また、研究方法に関しては、保育担当制の3類型それぞれに対して2クラスずつのフィールドワークを行い、食事場面に限定する場面観察をビデオと筆記によって行い、そのデータから発話と行為の分析を丁寧に行っている。分析の観点である3つの視点からの分析結果を、保育経験のある研究者4名と協議し、その妥当性を保障している。フィールドへのエントリー、承諾、関係性の構築など、実践研究を行うにあたっての基本的能力は備わっており、また、乳幼児期というマイナーを扱うフィールドにおいて必須の条件といえる厳しい倫理的配慮に関しても常に怠らない姿勢も認められた。

研究結果として、担当制保育3類型のそれぞれにおける保育プロセスの質の特性が明らかとなった。特に、「かかわりの継続性」「個と集団の捉え方」「時間的構造」「保育者と子ども的人数比率」が、担当制保育の保育プロセスにおける主たる要素であることを見出したことは、1-2歳児の食事場面は、保育形態によって保育者のかかわりの視点や方法が変わり、子どもたちに獲得される経験の質への影響が示唆されたことは、実践研究を理論化する質的研究の位置づけとしては大きい。

参考・引用文献は126編で、理論枠組みの構築及び実践研究の意義を捉えるために用いられている。また、申請者の本論文に関連する発表論文は3本であるが、その内1本が査読付き論文であり、全国的な学会誌に掲載されている。

このように本論文は目的の明確性、論文参照範囲の適切性、研究方法の明瞭性、研究結果の実践における貢献内容の明確さなどの点からみて博士論文としての水準にあると判断された。

一方で、本論文の課題としては、まず、保育形態の類型を均等化する手立ての必要性が挙げられた。本論文においては、担当制保育は先行研究の類型を申請者の定義に基づき再類型されてはいるが、結果から導き出されたその類型の特性から保育プロセスにおける差異が論じられているが、その前に、まず、3類型間内における保育プロセスの位相を導き出し、3類型の均衡化を図る必要がある。次に、研究における独創性のアピール不足が指摘された。この研究対象・場面における研究手法として何が最も独創的なアイデアに基づいてデータ収集が行われ、分析がなされたのか。研究の独創性へのアピールと共に論じる必要がある。特に食事場面という日常のルーティン化された場面を焦点化した方法論の意義については、その結果から導き出された内容と照らし合わせて論じたい。また、論文参照範囲の適切艇については、孫引きや翻訳本による参考箇所が散見される。博士論文執筆に当たっては、訳書を引用するにあっても、引用箇所に関しては原書を持って、その論証に当たるべきであり、その修正は必要であると考えられる。

最後に、質的研究法で指摘される対象事例については、本研究においても6事例であることから研究結果を普遍化することには意味を持たないが、今後も保育実践のフィールドワークが重ねられていくことでさらに保育実践に即した内容での議論を可能にする検証結果

が期待できる。

以上の課題はあるものの、本論文の価値や意義を大きく損なうものではなく、本論文を通して、乳児期の食事場面で保育担当制を実施する保育者に与える影響は大きいと考えられ、実践可能な研究結果が検証されたことの意義は評価されたい。

以上のような本論文の内容、および公開発表会（最終試験）における申請者の丁寧な報告・応答から総合的に判断した結果、審査員3名は全員一致でこの論文が博士論文を授与するに値する研究成果であることを承認したので、その旨報告する。

【審査の経過】

- 2019年6月25日 学位請求論文提出
- 2019年6月27日 人間科学研究科委員会 事前審査委員会設置の承認
- 2019年7月17日 第1回事前審査委員会 論文の審査 リライト指示
- 2019年7月26日 第2回事前審査委員会 リライト原稿の検討 本審査の承認
- 2019年7月31日 人間科学研究科委員会にて審査委員設置の承認
- 2019年8月2日 第1回審査委員会 公開発表会の承認
- 2019年8月27日 公開発表会（最終試験） 第2回審査委員会